

2023年3月6日(月)

老球の細道719号

四つの落とし穴

会津バスケットボール協会 室井 富仁

文藝春秋社の長年のロングセラー『文藝春秋オピニオン2023年の論点』を今年もようやく読み終えた。今知っておくべき論点が政治、経済、社会、文化、教育、スポーツなど色々なカテゴリーごとに分けて、1テーマごと当代一流の専門家が解説している。混沌とした今後の世界を判断するのに絶好の指南書である。

その本の「教育」のカテゴリーにおいて「花まる学習会」代表の高濱正伸氏が「小中学校受験する、しない？見極めるべき4つの落とし穴」という論点が気にかかった。高学歴を目指す「お受験」についての批判である。

そもそも「花まる学習会」という組織は、小学校高学年以降、伸び悩む子どもたちにある類型があることに気づいて、何が原因でそうなるのか。また、これからの社会で「自立、自活できる大人」「魅力的な大人」にはなるには何が必要かを発信している。

論点では幼少期まで優秀だった子ども達がその後伸び悩んでしまう「4つの落とし穴」について述べられている。幼少期なので特に親が子どもに対する接し方に警告を発している。バスケットボールでもミニバス時のスーパースターがその後伸び悩むケースがあるので、バスケットに関連させながら考えてみた。

①「人目」：幼児期は誰もが自分の興味関心に従って全ての瞬間を生きているのだが、就学前後から、外付けの評価や価値観が植えられていく。「期待されること」「他人に評価されること」が人生の基軸になり、「自分の心のワクワク」がわからなくなり、本当にやりたいことが分からなくなってくるという。バスケットボールでも「人目」を気にして声が出せない、積極的にプレイできないことがある。誰も見ていないのに、出すぎた杭になれない。

②「比較」：複数の人が何かをやれば必ず優劣がつく。負けたら悔しいのは当然だ。上には上がいるのが現実である。やがて「前の自分より伸びること」「自分の能力をフルに発揮して満足して生きていく」というジョン・ウッデンの「成功の哲学」に行きつくより他に道はないと悟らなければならない。

③「コンプレックス」：「私は頭が悪い」「音痴である」「身長が小さい」とコンプレックスを抱えて生きている大人も多い。幼少期に受けた親や先生の何気ない一言が原因になることがあるという。しかし、世の中にはコンプレックスをバネにする人も多い。野口英世、ベートーベン等。「なにくそ！」と頑張る気持ちはコンプレックスからうまれることがある。

④「やらされ感」：小さい頃から「・・・しなさい」で生きてきて、自分で決めてやり切る遊びや生活経験が少ないとやらされ感を根っこに持って生きていかなければならない。仕事、勉強、バスケットでも成果を出せるのは「主体的」「意欲的」に取り組む人間に決まっている。コートに一番早く来る、練習ドリルを一番に始める、コーチの説明をコーチの正面で聞く人で伸びなかった選手を、私はいまだかつて見たことも聞いたこともない。